

NPO STYLE

number : 2

自立生活センター・
ライフサポート水戸



「それまで自分は厄介者、人の世話になっているから迷惑をかけないように、という教育を受けてきた。でも、よりよい世の中に変えていくためには迷惑をかけてもいいんじゃないか、と思うようになった。」

...杉田桂子さん（写真中央・脳性マヒの障害をもつ）

3月24日、自立生活センター・ライフサポート水戸が主催する講演会とNPO法人設立総会に参加した。場所は赤塚駅MIOSにある水戸市福祉ボランティア会館。講演会では「いろんな生き方があっていいんじゃない」と銘打ち、地域で暮らす女性障害者の体験談や識者によるノーマライゼーション（機会均等）の話があった。

杉田桂子さん

3人の講師のまず1人目は、9年間養護施設に入っていた後、自立生活をはじめ7ヶ月目になるという杉田桂子さん。生活感がなかった施設に疑問をもち、ライフサポート水戸に入会、当事者団体として活動していく中で地域社会にエレベーターやスロープが設置されていくのを目の当たりに。そこで自分の可能性、力を感じて、自立生活をはじめようと決心。それまで自分は厄介者、人の世話になっているから迷惑をかけないよ、という教育を受けてきた。でも迷惑をかけてもいいんじゃないか、よりよい世の中に変えていくためには、と思うようになった。自立生活の決心をしたとき両親は涙を流した。信念をもっていてもそれは辛かった。しかし思い切って踏み切った。自分の生き方を確立していくしかないと思っ

細谷清子さん

次は自立生活17年、小学3年生の子どもをもつ細谷清子さん。振り返ると子育てに追われたという思い。出産のときは医者や看護婦が清子さんのために出産プロジェクトチームを組んでくれ、精神的にもとても楽だった。子どもは夫婦で育て、できないところはヘルパーや学生、社会人の手助けをえた。ただ、いろいろな人が来るのでトラブルも絶えなかった。例えば自分は子どもを抱けないので、抱き癖がついてくずらないよう介助の人には抱かないようお願いしていた。しかし、すぐ抱いてしまう主婦がいた。多くの人にふれて育ったわりには、子どもはマイペースにしている。小学校では高学年になるほど教室が上の階になる。授業参観のとき子どもは来てほしいというのが、真っ先に考えるのが階段。学校側の態度に問題を感じたり、父兄の視線に躊躇することもある。話の最後に清子さんの夫が語ったのは、子どものおかげで強くさせてもらっている」という言葉だった。

渋谷敦司先生

最後は茨城大学教授の渋谷敦司先生。少数者差別は社会全体の問題。自分の体験に基づいて他者の体験を語ってはいけない。当事者の意見を受け容れるべき。NPO

DATA

特定非営利活動法人(申請中)
自立生活センター・ライフサポート水戸
〒310-0903 水戸市堀町193番地の1
tel (fax) 029-251-0251
e-mail life-mito@nifty.com
バリアフリー情報誌「アシストてらす」
好評発売中!

法人化後のライフサポート水戸がサービスだけにかまけず、計画・実施・評価を通して問題提起をしいってほしい。そしてもっと女性のリーダーを発掘し育ててほしい、とまとめた。

自立生活センター・ライフサポート水戸とは:

障害者の自立・自立生活支援のため、障害をもつ人自身が中心となって活動をする当事者団体であり、茨城ではパイオニア的存在。行政や関係機関に対しては当事者の視点から地域福祉の推進に少なからず影響力をもつ。車いす用リフト車を所有し、手がけてきた移送サービスは障害者の活動範囲を確実に広げた。NPO法人化後も、自立につながることでできるだけ多くの活動を拡大し、今までになかったサービスも独自に手がけていく予定。(文・根本真嗣)